

【解説】 厩橋（前橋市）へ新年の挨拶のために使いとして赴く長楽寺の僧瑞と中間弥藤三郎に「ケンサン」で酒を飲ませたことが記される。「ケンサン」は、建蓋のことであろう。右の史料から、建蓋を使って酒を飲んでいただことがわかる。また、天目で酒を飲んでいることがわかる。さらに、1月26日条には、天目で茶とって飲んでいる（細谷昌弘『日記』にみる飲食器・贈答器』『長楽寺永禄日記』史料纂集、統郡書類従完成会、2003年）。永禄日記の建蓋・天目の記事はこの4例のみで、いずれも茶ではなく酒を飲んでいる。天目はお茶を飲むモノとは知りながら、お酒を飲んでいるのである。上野国の禅宗寺院では、建蓋・天目は酒を飲む時に使うモノであった。建蓋・天目はお茶を飲む時に使うモノとは限らないのである。

考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 山小屋

矢田俊文

永禄8年（1565）1月4日

無程、山へノホリ、小屋ニテ茶ヲノミ、

永禄8年（1565）1月9日

西（両カ）様共ニ、山之小屋ヨリ、マイラスヘキト、返来シテ、カヘシツル、

永禄8年（1565）3月18日

金山へ一札、同金筑へ一書越ス、存書記留守ナル間ト、カス、山之小屋ニ置カヘル也、

永禄8年（1565）3月25日

山之小屋へノホリ、外居一ツイニ入、坂中へ抹茶ヲソヘマイラス、（中略）山之小屋ニテメシヲ少用、非時ヲモ少用、寝也、

永禄8年（1565）7月28日

山之小屋ニテ、楊花ヲ茄子ヲ以、調一椀用、喫茶、

永禄8年（1565）8月10日

山之小屋へ登、

【解説】 永禄日記にみえる「山」とは由良氏の城のある金山のことである。よって、「山之小屋へ登」（8月10日）とあることから、「山之小屋」すなわち山小屋は金山にある小屋のことである。永禄日記には見えないが、「根小屋」という語もある。天正8年（1580）4月22日と推定される上杉景勝書状（『新潟県史 資料編5 中世三』2843号）には、「其上今廿二早天、根小屋へ押寄、令放火、巢城計ニ成置候」とあり、城に関連する根小屋と呼ばれる施設があることが知られる。永禄日記にみるように、山小屋が城のある山に設けられた施設であることを考えれば、根小屋とは、城のある山の根に設けられた施設であると考えることができる。

山小屋という用語は永禄日記にだけに見えるのではない。たとえば、山小屋研究で有名な元龜3年（1572）8月10日と推定されている武田家印判状（『愛知県史 資料編11 織豊1』）にも「山小屋」

と見える。この武田家印判状では、「山小屋」がどのようなことに使用されたのかは明確にはできない。しかし、永禄日記では、山小屋が何に使用されているのかがわかる。3月18日条によると、永禄日記の筆者義哲は、金山(由良成繁)・金筑(金谷筑後守)宛に書いた手紙を渡すことができなかつたので、山小屋に置いて帰ったとある。3月25日条では、義哲が山小屋で食事をしたことがわかる。また、7月28日条では、喫茶をしたことがわかる。このように、城に用件があつて上つてきた長楽寺の義哲にとって、山小屋は文書を置いて帰ることができるような施設であり、食事・喫茶ができる施設であつた。

山には小屋が一つだけあつたのではない。片桐昭彦氏が明らかにしているように、山には由良氏の家臣矢内修理亮の小屋もあつた(片桐昭彦「考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 小屋・庭」『第1回中世考古学文献研究会資料集』新潟大学人文学部、2003年)。

戦国期の城には、山や根に多くのさまざまな小屋と呼ばれる施設があつたのである。なお、義哲が使用した「山之小屋」については、赤澤春彦「戦国期長楽寺と寺僧」(『長楽寺永禄日記』史料纂集、続郡書類従完成会、2003年)が詳しい。参照されたい。

#### 考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 蔵屋

片桐昭彦

永禄8年(1565)2月23日

正参・泉蔵司、大田蔵屋俵ツミナヲシニ行、大麦七十一、小麦去年之分十二・去々年分六、合十八、大豆一、モチ三、ウルシー、以上合俵カス九十四、タワラナトリカへ、下シキナドシカヘテヲクト云イキ、七郎太郎・小三郎・太郎四郎モ行、正参ハカヘリ此由申、泉蔵司滞留イタシツル、爰許ヘモ九十四之外、此日大麦五・大豆一ツケサスルト云コト也キ、

【解説】長楽寺の僧正参と泉蔵主が、七郎太郎・小三郎・太郎四郎を連れ、大田(太田市)の蔵屋へ俵を積み直しに行ったこと、そして、大麦・小麦・大豆・餅米・粳米合わせて94の俵を取り替え、下敷きなども替えたことが記される。この史料から、金山城下の太田の町に長楽寺が管理する蔵屋があり、穀物94俵(種用か食用かは不明)が貯蔵されていたことが分かる。そして、94俵以外に大麦5俵・大豆1俵を付け加えたことが記されることから、おそらく大田の町で調達し、不足分を補充していたことが分かる。長楽寺の管理する蔵屋は、大田の町のどこに位置していたかは不明であるが、少なくとも俵を100個分収納できる広さがあつたことが知られる。

#### 考古学のための上野国長楽寺永禄日記解説 小屋・庭

片桐昭彦

永禄8年(1565)8月10日

山之小屋へ登、(中略)、則物本一皮籠晒、

永禄8年(1565)8月11日

山ニテ時ヲカサ二程用、天気ハシカハ、ナケレトモ、地之字箱之本ヲ晒、